

Emily Brontë の研究

—Heathcliff—

宮川下枝

Emily Brontë was a 'space-sweeping soul' to use her own phrase about a philosopher; her thought on life, death, immortality, imagination, liberty, deity, had a depth and a breadth of vision comparable to that of Wordsworth or Shakespeare.⁽¹⁾

Phyllis Bentley は *The Brontës and their World* に於いてエミリーの幅広い洞察力を讃えている。(エミリー・ブロンテは、彼女の哲学者を評する自らの言葉を用いて言えば「宇宙を蓋う魂」であった。自由、神についての彼女の考えは、ワーズワース、あるいは、シェクスピアにも比すべき洞察力の深さと、幅を有していた。)

ブラッセル時代の作文についても、又ヒースクリフの愛、憎しみについても、既にこの学会誌に於いて述べているところであるから、重複は避けることにして、エミリーがこのヒースクリフという人物の中に、如何に共感を覚えているかを text の中から丁寧に拾い上げてみたい。それは、彼女自身の姿であろうと思われることが多くある。

(1) 共感

Sympathy という語には、

(having a fellow feeling...O.E.D.)⁽²⁾

(Being simultaneously affected with the same feeling, tendency to share or the state of sharing another person's emotion or sensation or condition.....C.O.D.)⁽³⁾

という意味が盛られている。決して同情ではなく、共感である。同情という言葉は、エミリーの最も嫌いな言葉であった。 "No coward soul is

mine.”と言う如く、人に憐みをかけることも嫌いだったし、人からも憐れまれることも嫌いであった。彼女が同情ではなく、共感を感じたのが、ヒースクリフであるということが、第一章を読んでいるとよく分る。小説の書き出しが、作家にとって、如何に大切なものであるかということは、一般に知られた事実であるが、あの無愛想なヒースクリフが、しょっぱなから登場する『嵐ヶ丘』とは一体どういう小説であろうと思われるのが普通であろうが、あの第一章にこそ、エミリーの意図はよく、読みとれると思うのである。

1801

I have just returned from a visit to my landlord—the solitary neighbor that I shall be troubled with. (Chapt. I)

(1801年

今、私は、地主の処から帰ったばかりだ。これらか困らされる孤独な隣人だ。)

1801年

と新しい世紀の始めて始まる、この小説の書き出しからして、エミリーが、新しい意気込みに燃えていることがうかがえる。この章には、得意の絶頂のヒースクリフが登場するのである。

長年の復讐を次々に実行して遂に Wuthering Heights, Thrushcross Grange の二つの屋敷を手に入れて、あとは、両方を捻り潰せばよいだけの状態になっているのであるが、彼は果して得意満面の顔をしているであろうか。実に、すごい顔をし、仏頂面をしているのである。

His black eyes withdraw so suspiciously under their brows.

(Chapt. I)

(彼の眉毛のかげの黒眼が、いかにも、疑い深く、くぼんだ。)

だが、Lockwood は自分の地主を訪れた時

“Heathcliff and I are such a suitable pair to divide the desolation between us.” (ibid.)

(ヒースクリフと自分とは、この寂しさを分ち合うのに似より

の一对である。)

この人こそ、自分の孤独をわけ合うことの出来る人だと、A capital fellow! と言っているが、これがエミリーの心の底からの思いで、人見知りをし、同じ屋根の下で、姉シャーロットの婚約者を見ても、顔をそむけたという程の他人に誤解され易い、自分自身を彼を通して描いてみたかったのであろう。

“Thrushcross Grange is my own.”

“I should not allow anyone to inconvenience me.” (ibid.)

(スラッシュクロス屋敷は、わたしのものですからな。ひとから迷惑をかけられて放っておくわけもなからう。)

ぶっきら棒のヒースクリフの態度が窺える。自分の新しい屋敷を借りてくれる、ロックウッドに対してさえ只、“walk in”「お入り」と言うだけで“The ‘walk in’ was uttered with closed teeth,” (ibid.)

(その言い方も只口を閉じたまま、)そしてその口調は、あたかも and expressed the sentiment “Go to the deuce.” (ibid.)

(地獄にでも行けと言わんばかりである。)

“even the gate over which he leant manifested so sympathetic movement to the words” (ibid.)

(門さえも快く「お入り」とは言ってくれない。)

“I felt interested in a man who seemed more exaggeratedly reserved than myself.”

(自分に輪をかけたようなはにかみ屋に興味を持った。)この言葉は、外ならぬエミリー自体の言葉であらう。そして又、ロックウッドの馬を引っ張って行くにしても、不機嫌に歩道を連れてゆく。“and then sullenly preceded me up the causeway,” (ibid.)

(むっとりし乍ら、土手道を案内してくれた)更に、加えて下男も気むづかしい顔で、不満を表し

“The Lord help us!” he soliloquised in an undertone of peevish displeasure...” (ibid)

「神さま、お助けを」と小声で独り言を言う程の主人に、お似合の下男である。だが、このヒースクリフも心の中では人を愛することも、憎むことも出来る。これがエミリーの表現したい人間で

“He’ll love and hate equally under cover.” (ibid.) (彼は、愛も憎しみも、ともにかくすのだろうし)

and esteem it a species of impertinence to be loved or hated again.”
(ibid.)

(そして愛や憎しみを返されることは一種の無礼だと考えるのだろう)

“I’m running on too fast.” いきなり、ヒースクリフへの共感を書き過ぎたかなと感じた作者は、ヒースクリフには彼なりの考えもあろうかと自分の筆の走りを抑え、それでもなお二人は同じ体質だと述べる。

“Let me hope my constitution is almost peculiar” (ibid)

(どうも、ぼくの性格はよっぽど特殊らしいからな。)と云う。この場合エミリーはロックウッドになり切ってしまっている。がこのヒースクリフも自分のお客様に余りそっけないのもと思いかえして、ロックウッドに興味のある話題を選んでくれる。

“introduced what he supposed would be a subject of interest to me—
(ibid.)

(ぼくが関心を持ちそうな話題を考え乍ら話しはじめた。)

こうして読んでみると、この第一章は、エミリー自身をさらけ出した実に興味深い書き出しであると思うのである。

そして又ここに、Haworth に対する彼女の愛着も感じられる。

“This is certainly a beautiful country! In all England, I do not believe that I could have fixed on a situation so completely removed from the stir of society.” (Chapt. I)

(こゝは確かに素晴らしい土地だ。イングランド中探しても、これ程世間のさわがしさから完全に切り離された場所がほかにあるとは思われない。)

こゝこそが、A perfect misanthropist's heaven（人間嫌いが住むのに理想の天国）と言い、自分の理想の地に自分の分身をこゝに登場させる。彼女自身が如何に内気な人間であったかは「彼女の生涯」にもある通りである。

(2) 甘えを許されぬ人間

何故、エミリーがヒースクリフのような人間を創り出したかという尽きぬ興味は、果てしなく続くのであるが、次に私の考えることは、彼女はヒースクリフを通して、甘えを許されぬ人間を描こうとしたことではないかということである。

この態度は、最後迄医者に診て貰うことをせず、敢然として死んでいった彼女自身の中に見られるものであるが、又彼女の詩「臆病な魂は私にはない」No coward Soul is mine. に於いても充分見られるものである。私も余りにも屢々この言葉については言及して来た。だが最近に到り私は、

“It will degrade me to marry Heathcliff” (Chapt. IX)

の言葉に続くヒースクリフの態度の中に、新しい意味、又エミリーの意図を感じ始めハツとしているわけである。自分を向上させようとしない態度を、エミリーは degrade とみる。そのような者には、キャサリンは魅力を感じない。

“And should I always be sitting with you? she demanded, growing more irritated. “What good do I get? What do you talk about?” (Chapt. VIII)

ある夜ヒースクリフはキャサリンに、リントンとばかり時を過すことの多くなった相手に、自分と話をして呉れる夜の少なくなったことなじる。だがその言葉に対して、キャサリンの返事は実にそっ気なく手ぎびしい。客観的に見れば冷酷な返事でさえもある。

(それで私に何時も、いっしょにいたいのか？ と彼女は一層いらいました。それがわたしになになるのか？ あんたはどんな話が出るっていうの？) 自分を向上させようとしない人の話に何の魅力がある

か？ 何の魅惑も感じる事が出来ないという、エミリー自体の言葉であるとするならば、この言葉の意味もよく理解出来るのである。

愛というものには、もっと人を楽しませようとする気持ちがなくてはならない。人を楽しませようとする言葉を言い、人を喜ばせることをしなければ駄目よ」と厳しい。人は自分に甘えてはならないのであるというエミリーの激しい批判も受け止められる。

“You might be dumb, or a baby, for anything you say to amuse me, or for anything you do, either!” (ibid).

(まるで、啞か赤坊みたいなくせにさ。わたしを喜ばせることなんて、なにも話せないし、なにも出来ないじゃないの？)

“You disliked my company, Cathy?” (僕と一緒に過すのは嫌なの？)

“It’s no company at all, when people know nothing and say nothing. (ibid).

(何も知らないし、何も話せない人なんて、遊び相手とはいえないわよ)ときめつけて手きびしい。相手を楽しませる為に、人は種々の智識を身につけ、自分を豊かにすべきである。自分を向上させようとしなかったヒースクリフにキャサリンは魅力を感じなかった。

After a prolonged stay at the Grange, however, Cathy adopted double standards at home. She knew better than anyone the dilemma she was in as a result of Heathcliff’s degradation.”⁽⁴⁾

(グレンデでの滞在が、長びいた後、家へ帰ってからのキャンシイは二重の様相を呈した。ヒースクリフの墮落の結果として板ばさみの辛さを誰よりもよく知っていました。)と F.B. Pinion は “*A. Brontë Companion*” に於いて述べている。結局ヒースクリフの受けた痛手即ちキャサリンを失うことになった苦難は、彼自身の招いたもの、自分への甘えからであったと解する時始めて、

“It would degrade me to marry Heathcliff.” (Chapt. IX)

(ヒースクリフと結婚すればが私駄目になるわ) との意味がよく分るのである。

“Doubtless Catherine marked the difference between her friends, as one came in and the other went out. The contrast resembled what you see in exchanging a bleak, hilly, coal country for a beautiful fertile valley;” (Chapt. VIII)

(むろん、キャサリンには、はいつて来る人と出てゆく者と、この二人の友だちのちがいがはっきり印象づけられたと思います。その対照は荒れた山また山の、石炭地帯の眺めから、美しく豊かな谷間の眺めに変ったようなものである。) この比較は実に面白い。私もマンチェスターあたりの煙の炭坑街を見たが黒ずんで汚なかったことそれにひきかへイギリスの農村の緑の美しかったことを思い出す。

Pride makes Heathcliff contemptuous, (Chapt. XIV)

(高慢なため、彼は卑劣になっていました。)

“Proud people breed sad sorrows for themselves.” “But if you be ashamed of your touchiness, you must ask pardon, mind, when she comes in.” (Chapt. VII)

(傲慢な人間は、自分で自分の悲しみをつくっちゃうんですよ。でもね、もしあんたが、自分の怒りっぽさが恥ずかしいと思うなら、キャンイが来た時、あやまることだわ。)

とネリーも謙虚になること、自分に甘えてはいけなことをさとすのである。

エミリーの伝紀を、いろいろに読み重ね、彼女についての知識を加え、その人物を更によく理解して、Text を読んでみると、彼女自身がヒースクリフの中に現れている箇所によく出逢うのであるが、遠慮深い彼女がかくも激しいものにヒースクリフを仕立てたのは彼女の中に燃える情熱等が偲ばれる。その測り知れぬ奥深さをその思想に於いて、感情に於いての幅広さの中にヒースクリフを通して求めることは楽しい労作である。

At this time, being tall, Emily had striking appearance,

she had a 'lithesome graceful figure,' a pale complexion and grey blue eyes, which through her intense reserve, seldom met a stranger's gaze. In company she spoke little, but liberated amid her family or on the moors she could command the day... Ellen Nussey found her 'intensely lovable.' 'One of her rare expressive looks was something to remember through life, there was such a depth of soul and feeling, and yet such a shyness of revealing herself.'⁽⁵⁾

(この当時、エミリーは背が高く、際立って見えた。しなやかな、優雅な姿をしていた。青白い顔色、灰色がかった青い眼。だが控え目な彼女は、滅多に他人の眼をみつめることはしなかった。人と一緒にいる時も、彼女は殆どしゃべらなかつたが、家族の中では寛ぎ、荒野に出れば一日中自由自在に振舞った。エレンナッシーは彼女をとて可愛いいと思った。「まれに見るその表情に富んだまなざしは一生忘れられないものです。そこには心の奥深くの思い感情が潜んでいましたが、恥しがり屋の彼女は自分の感情を人には示しませんでした。』と)

Ellen thus exemplifies the difficulty we face in trying to understand Emily. Even Charlotte confessed that after a lifetime she never knew what Emily was feeling.⁽⁶⁾

(エレンナッシーは、エミリーを理解することのむづかしさを述べている。シャーロットでさえ、エミリーが何を感じているか知ることは決して出来なかつたと、エミリーの死後告白している。)

Brian Wilks も述べる通り、

"Her intensity of feeling, so fundamental to her poetry, so evident in *Wuthering Heights* is nowhere chronicled or explained."⁽⁷⁾

「その強烈な感情は、その詩に基本的に現れ、『嵐ヶ丘』にははっきり表明されているが、何処にも別に記録にも止められず、説明もされていないのである。

エレンナッシーにも、姉シャーロットにも、理解出来なかつたエミリー

の思いを幾分でも知ることが出来たとしたら幸せである。

姉シャーロットの言葉を引用しておこう。

“...Had she but lived, her mind would of itself have grown like a strong tree, loftier, straighter, wider-spreading, and its matured fruits would have attained a mellower ripeness and a sunnier bloom, but on that mind time and experience alone could work, to the influence of other intellects it was not amenable.”⁽⁸⁾

(もし彼女が生きながらいたら、おそらくその精神は、おのずから丈夫な樹として、より高く、よりまっすぐに生長して枝をひろげ、そうして立派に実った果実は、もっと甘く熟れ、太陽に充分色づくことができたと思う。まったく、あの精神に働きかけることが出来るのはおそらく時と経験だけで、ほかの知識の影響に対しては不変だったと思われるからである。)

“He wrought with a rude chisel.”⁽⁹⁾ 非常に荒削りの人物であるとしか、姉は見ななかったのであるが、それは不完全な見方であったことを考えてみたい。

エミリーが何故、ヒースクリフという解き難い人物を表現するに到ったか、更にいろんな角度から考えてみたい。

(1) エミリー自身の苦悩の表現

エミリーは、非常に忠実に自分自身の姿というものを追いつめて考えている。自分の中にある残忍性、それを如何に理解し如何に克服すべきか、自分との闘い、長年に於けるその苦痛は、彼女の詩の中に見出すことが出来る。そうして、そのような心の苦しみを持つものへの同情、自分自身への憐れみのようなものが、小説の中でヒースクリフという人間になって、どっと堤を切ったように、溢れ出たとみてはいけなだろうか。但し、このエミリーの書きためていた詩は、エミリーの机の引出しの奥深くに隠されていたもので、シャーロットが偶然の機会に見付ける迄は、誰にも見せ

られなかったものであるから、姉でさえ妹の心情を知る由はなかったのである。

Do I despise the timid deer
Because his limbs are fleet with fear?
Or would I mock the wolf's death-howl
because his form is gaunt and foul?
Or hear with joy the leveret's cry
Because it cannot bravely die?

No! Then above his memory
Let pity's heart as tender be:
Say; Earth lie lightly on that breast,
And, kind Heaven, grant that spirit rest!⁽¹⁰⁾

恐れて逃げ廻っているからと言って、
私は臆病な鹿を蔑むであろうか？
決して蔑みはしない。

あのヒースクリフという、残忍な復讐をする人間に対して、何ら非難も、批判も与えようとしないう、エミリーの態度に対しては、私も幾度か非常に疑問を持ったことがある。そして、私も姉シャーロットと同じように、それはエミリーの若さの故だと考えたことであつた。彼女がもう少し、沢山の作品を書くに到ったら、もう少し、この主人公に対して批判の眼を向けたであろうと思つたこともあつたが、彼女が長年如何に考え続けたが、その過程を詩の中に読みとるならば、それは決して、彼女の批判眼の足りなさではないことを理解出来るのである。この臆病な鹿を自分は決して蔑みはしないという深い共感の心こそが、ヒースクリフをありのままに見つめていこうとする、エミリーの態度であり自分自身への思いである。

その姿が醜いからと言って
狼の死の唸りも侮りはしない。

復讐にあげ暮れた、ヒースクリフの半生はたしかに、醜いものであつたが、エミリーはこれに対して安らかな死を与えている。静かに死なせてやりた

かった、彼女の心情をうかがうことが出来る。

勇敢に死ねないからと言って、

子兎^{うさぎ}の叫びを、喜び乍らきくことはない。

荒野の中に過した、エミリーの眼にうつるものは常におびえて逃げ廻る鹿であり、遠くにきく狼の声であり、又苦しみ乍ら死んでいく、子うさぎの姿であった。それは、心の中の醜さに溢れた自分自身であり、怯えた自分であり、哀れな自分の姿であった。だが、その死を心から痛むものがあることを彼女は考え悟ったと言ってよいだろう。

いえ、誰も蔑み侮りはしない。

その思い出の上には憐れみの心がやさしくありますように、

土はその胸の上にそっとかかってくれ、

親切な天はその魂を休めて下さるように。

死を天は静かに見守って下さるのだと考え得た時にこそ、深い安心を彼女自身も味うことが出来たのであろう。

Norman Sherry も次のように述べている。

“This conception of the unity of nature and human nature accounts for her wide sympathy with all creature. The poem, Well, some may hate, and some may scorn, demonstrates this when the poet finds sympathy for a fallen ‘wretch,’ seeing his sins as being as much part of his individual nature as is the appearance of the wolf part of the leveret’s nature (and this recalls *Wuthering Heights* very strongly:)⁽¹¹⁾

(自然と人間性との融合というこの考え方は、彼女があらゆる生きものに対して、広い共感を抱いていたことを証する。ある者は憎むかも知れないし、ある者は蔑むかも知れない。というこの詩は、亡びし「惨めなるもの」に対して詩人が深い共感を覚え、人間の罪というものは醜い狼の姿、又小うさぎの性格の一部と同じほどに、個々の人間の性格の一部であると見付けるとき、このことを証する。(そしてこれは『嵐ヶ丘』を極めて強く思い起さ

せる。)

「弱いからと言って、けなしはしない。」と言って罪ある人間も、その性格はその容ぼうと同じほどに、その一部であるというところに、かかるヒースクリフのような人物を、長い間、心の中で温めて来たことが読みとれる。

“Well, some may hate, and some may scorn,
And some may quite forget thy name,
But my sad heart must ever mourn
Thy ruined hopes, thy blighted fame.”⁽¹²⁾

人はよし、憎む者もあろう。
さげすむ人もあろう。
お前の名を忘れ去る者もあろう。
だが私の悲しむ心はお前の潰^{つぶ}えた望み
お前の立ち枯れたほまれをとこしえに
いたむだろう。

このように、人は何と思おうと私だけは、彼の思いを大事にして上げるとの念が読みとれる。

Thy mind ever moving
In regions dark to thee;
Recall its useless roving—
Come back and dwell with me.⁽¹³⁾

お前の心は常にお前にとって暗い所で
さまよい続けている。
その無益なさまよいは撤回して、
戻って来て私と一緒に住みなさい。

長い間の、心の迷い、悩みのあと、光を見出した心境である。

そして、この心境の中に忽然と出現した姿が示されている。それは“*He comes with western wind.*”⁽¹⁴⁾ (彼は西風に乗って来る)ものであり、やが

て、それはたとえ、天地が崩れ去るとも揺ぐことなく、自分の心の中に残る、永遠の神の如き存在として彼女の中に把握されているものである。そして、そのすべての思いをヒースクリフに托している。

Though earth and moon were gone
And suns and universes cease to be
And thou were left alone
Every existence would exist in thee.⁽¹⁵⁾

よしや地球も月も亡びさり
日も^{あめつち}天地も在らずなり
^{なれ}汝のみ一人残るとも
あらゆる^{もの}存在は^な汝が^{うち}中に在らん。

ヒースクリフは、エミリーにとって神と同じような存在として表われるのである。Thy は神であり、又ヒースクリフであるとは Norman Sherry, V. Woolf も言うところである。そして、濃い眉をした、鉄のような強い男が、自分の心の中に浮び上ったことは、次の詩の中に現れている。これが、小説を書くにあたって描き出した主人公ヒースクリフと見て差支えないであろう。

The soft unclouded blue of air,
The earth as golden-green and fair
And bright as Eden's used to be:
That air and earth have rested me.

That iron man was born like me,
And he was once an ardent boy:
He must have felt, in infancy,
The glory of a summer sky.⁽¹⁶⁾

静かな雲のない青い空のもと
地は黄緑に美しく
昔のエデンの園の如く輝しい

その空も地も私を休めてくれた。

私と同じにかの鉄の人も
彼はかつては熱心な少年であった。
幼児のころは夏空の美しさを
感じたに違いない。

感受性の強い、而も鉄のような意志をもった少年、かつては (once) という言葉により、その一人の男の *degrade*—これは非常にむづかしい言葉で、私は何度かその意味を考えたものであるが—復讐へとかりたてられてゆく様を、描こうとした構想が、既に心の中に早くからあったことをうかがい知ることが出来る。また、*like me* という言葉からして、それは、自分自身と考えてよいのかも知れない。自分も幼い頃は気持の美しい少女であった。が、その心はどんどん汚されていった。人間の心の中にある、残忍性についての悩みは、彼女のブラッセル時代の作文の中によく現れている。

以上、私はエミリーの詩の中に、彼女の苦悩を汲み取って来たが、この書きためられた詩の世界、殆どが *Gondal* 物語となっているが、この中に *Wuthering Heights* の *Source* を求めることは *Miss Van Ghent* も研究していることであり、*John Herwish* も “Both worlds have strongly dynstic flavor.”⁽¹⁷⁾ と述べているところである。

(2) 少年ヒースクリフ

では何故、エミリーはこのような少年を先ずヒースクリフとして登場させたのであろうか？ これは、なかなか興味深い問題である。私なりに考えてみたい。

ヒースクリフは、*Earnshaw* 氏がリバプールへ商用で出かけた折、道ばたに居た素姓も知れぬ、色の黒い子供を連れて帰ったことになっているが、この中に、いろいろのことを考えることが出来て面白い。

(a) A gift of God

神さまのお授け下さったものとして、アーンショウ氏が、家族にこの少年を紹介しているが、これを総べて、人間は神よりの贈物であると考えるエミリーの思想と受けとってよいのではなからうか。

(b) came from the devil

it's as dark as if it came from the devil.

(Chapt. IV)

「悪魔のよこしたように黒い」とネリーの言う言葉の中に含まれている種々様々の意味を考えてみよう。「神からの贈物」そして同時に「悪魔の所からやって来た」この相反する二つの語は、God-side, devil-side 善悪両面を兼ね備えた人間、いやむしろ神の意志のもとに生れ乍ら悪へと走る人間、そういったものをエミリーは頭の中に思い浮べていたと考えることが出来る。

更にまた、両親も、名前も持たぬ、全く新しくここに創り出された人間であることも興味深い。これは後に到って、失意の少年ヒースクリフを慰さめて、「あんたは自分のことを王様の子と考えてもいよでしょうよ」とネリーが言っている箇所と関聯させて考えると面白い。

'You're fit for a prince in disguise. Who knows but your
father was Emperor of China and your mother an Indian Queen,
...(Chapt. VII)

自由自在に想像を馳せることの出来る、エミリーの頭脳の働きが、偲ばれて愉快な処である。素姓が知れないと言うことは、一面、自分の身分をどのように考えようと自由であるとみて楽しい。また、既に黒人問題、人種の問題がこの中にちらりと顔を見せているような気さえするのである。これは、私のまだそこ迄、勉強のゆきとどいていないため何とも言うことは出来ないが、私共が、外国を歩いてみて考えさせられる黒人の問題、これは、当時でも既に人々の意識にのぼっていたのではないかと想像される。顔の黒い少年を見て、悪魔の処から来たようだと思ったのは始めて黒人を見た時の、エミリーの驚きではなかったのではなからうか。いろいろ考えていた折、この文章を見出すことが出来た。

“The pattern may have originated in the Brontes’ reaction to the absolutism, the ‘black and white’ of Calvinist ideas.”⁽¹⁸⁾

(この思想様式は「絶対説」すなわち、カルビン派の人々の考えである黑白説への、ブロンテ一家の反撥に根づいたものかもしれない。))

これで私の考えも、立証されたと見てよいのではないかと思う。

(c) エミリーの父の慈善事業

先日読んだエミリーの伝記から、私は次の事実を知ることが出来て、疑問の一つが解けたわけである。

The duties of a clergyman in 1810 were far wider and altogether more secular than we nowadays imagine. In gaining the priesthood Patrick had also become part of the hierarchial structure for the maintenance of law and order. In a country that was divided into parishes, each with a large measure of responsibility for its own affairs the parish priest undertook a high degree of responsibility for all the public affairs of the folk in his care. It was to the parish priest that people deferred for help and advice with their day-do-day problem.⁽¹⁹⁾

(1810年の牧師の務めは、我々が今日想像するよりずっと幅広く、ずっと世間的であった。牧師の資格を得ることに依り、パトリックは、法と秩序を維持するための教権機構の一部にもなった。教区に分けられて、それぞれの教区はその教区内の事柄に対して、高度の責任を有している国において、教区の牧師は、自分の受持の教区民の公的な事柄に対しては高度の責任をもった。人々が、毎日の問題に関して受けた援助と助言のゆえに敬意を払ったのは、教区牧師であった。)

He would have dealings with more than one generation of the families in Haworth, sharing in their joys as well as in their sorrows.⁽²⁰⁾

(よろこびも、悲しみも分け合って、ハワースの中の何世代も

の家族と彼はかかわりを持って来た。))

これを読むにあたって、少年ヒースクリフの登場の理由をよく理解することが出来たのである。父の世話した少年の中には、いろいろの境遇の少年、少女がいたであろう。確かに素姓も知れぬ子供達もいたであろうと思われる。又父パトリックが何処からか連れて来た少年もあったであろう。そうした少年達の、新しい環境になじまぬ頑固さが眼に見えるようである。

He seemed a sullen, patient child;— (Chapt. IV)

(彼は陰気な辛抱強い子供に見えました。)

He would stand Hidley's blows without winking or shedding a tear.

(ibid.)

(ヒンドレーがなぐっても、目ばたきもせず、涙一滴落さずに耐えるのでした。)

He was not insolent to his benefactor, he was simply insensible;

(ibid.)

(恩人に対して、不遜なのではなく、全く無感覚なんですね。)

(3) 強い巨大なものへの憧れ

“her admiration for the heroic” という言葉が用いられているが、これは小説の中の Catherine Earnshaw の性格であるにしる、取りも直さず、エミリーの性格でもあろう。小説の終りにあたって、ヒースクリフは、ネリーに「“like Hercules” ヘラクレスのような大力無双の力で、両家押し潰しにかかったが……」と話しているところがある。ギリシャ神話の中にある、英雄への憧れがエミリーの心の中にあつたのであろう。その怪力によってやり遂げるのは、前述の詩の中にも(鉄の男) iron man と述べていたように、体の弱いエミリーには夢であつたらう。

“I get levers and mattocks to demolish the two houses, and train myself to be capable of working like Hercules. (Chapt. XXXIII)

(おれは両家を破壊すべき挺子も、つるはしも、手に入れたし、ハーキュリーズのようにそれを使えるように鍛練もした。)

Hercules とは十二の難事を仕遂げた Jupiter の子で大力無双の英雄である。

この「嵐ヶ丘」の主人公ヒースクリフという偉大にして巨大、愛と憎しみに溢れる不可思議な人物に私も長年驚異の眼を瞠って来たのであるが、今こうしてじっくりと、ヒースクリフなるもの、又その中に見出すことの出来るエミリー・ブロンテ自身をみつめ、考察してみて今更のように、自分自身を深くみつめることの出来たエミリーの偉大さを感激をもってかみしめているのである。

最後に「嵐ヶ丘」のよりどころについて種々の説を列挙して終りたい。

The Source of *Wuthering Heights*

(a) 村の話

Ellen Mussey remembered from her first visit to Haworth how Mr. Brontë told strange stories he had heard from the oldest of his parishioners of grim events in the lives of people in outlying places, and she recognized some of these in *Wuthering Heights*.⁽²¹⁾

(エレン・ナツシイは、ハワースを始めて訪れた時、ブロンテ氏から、彼がそのはずれの村に住む教区の人々の間の、陰さんな出来事を村の古老からきいた不思議な物語をきいた。それが、「嵐ヶ丘」の中にも幾分盛られていることを彼女は認めている。)

(b) Scott の影響

The influence of Scott is unmistakable.⁽²²⁾

(スコットの影響を受けていることは間違いない。)

(c) Byron の影響

How much Emily read on the life on Byron is not known, but her familiarity with Moore's biography is beyond doubt. It seems likely that, whether she realized it or not, she drew a number of suggestions from it for her novel.⁽²³⁾

(どれだけ、エミリーがバイロンの生涯について読んだかは知られていないが、ムーアの伝紀に通じていたことは疑いもない。彼女が、自覚して居ようと居まいと、その中から多くの暗示を自分の小説に受けたように思われる。)

(d) Hoffman の影響

At one time it was customary to assume that Hoffman's stories explained the violence of *Wuthering Heights*...⁽²⁴⁾

(又ひと時はホフマン物語りが『嵐ヶ丘』の狂暴性を説明していると考えるのが常識だった。)

In *Wuthering Heights* and "*The Bridegroom of Barna*" we find the union of violence and an overmastering love which is almost spiritual.⁽¹⁵⁾

(『嵐ヶ丘』と『バルナの花嫁』とに共通の狂暴性又精神的な激しい情熱的な愛情を見出せる。)

註

- (1) Phillis Bentley: *The Brontës and their World*, Thomas and Hudson, p.88.
- (2) O.E.D
- (3) C.O.D.
- (4) F.B. Pinion: *A Brontë Companion*, Macmillan, p.223.
- (5) Brian Wilks: *The Brontës*, Viking, p.76.
- (6) "
- (7) "
- (8) *Wuthering Heights*.: Preface.
- (9) *ibid.*
- (10) Emily 詩集: *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, Edited by C.W. Hatfield, Oxford University
- (11) Norman Sherry: *Charlotte and Emily Brontë*, Evans p.100.
- (12) 詩集 Emily
- (13) 同上
- (14) 同上

-
- (15) 同上
- (16) 同上
- (17) John Herwish: *Emily Brontë a Critical Biographical Study*, Macmillan
p.115
- (18) John Herwish: *Emily Brontë a Critical Biographical Study*, Macmillan,
p.113.
- (19) Brian Wilks: *The Brontës*, Viking p.14
- (20) " p.32
- (21) F.B. Pinion: *A Brontë Companion*, Macmillan, p.205.
- (22) " p.207
- (23) "
- (24) " p.208
- (25) "